



政治経済学 II

矢内 勇生

授業用のウェブページ

www2.kobe-u.ac.jp/~yyanai/jp/classes/pe2/

or

www.yukiyanai.com → [授業] → [政治経済学II]

第2回：公平性

- 公平性 (fairness)
 - ▶ 公平性とは何か
 - ▶ 公平性は望まれているのか
 - ▶ 公平性は普遍的な価値か

経済学の基本モデル

- 人間は合理的に行動する
- 人間は利己的 (self-interested) である
 - ▶ Homo economicus (経済人) : 経済合理性のみに基づいて個人主義的に行動する人間

経済人と経済格差

- 格差：個人主義的行動の集計結果
 - ▶ 富裕層からみると？
 - ▶ 貧困層からみると？
 - ▶ 中間層からみると？

経済人による格差の是正

- 経済人が格差を縮小しようとするのはどんなとき？

- ▶ 格差を縮小するほうが得になるとき！

- 貧困層：格差縮小は得になりやすい

階級対立？

- 富裕層：格差縮小は損になりやすい

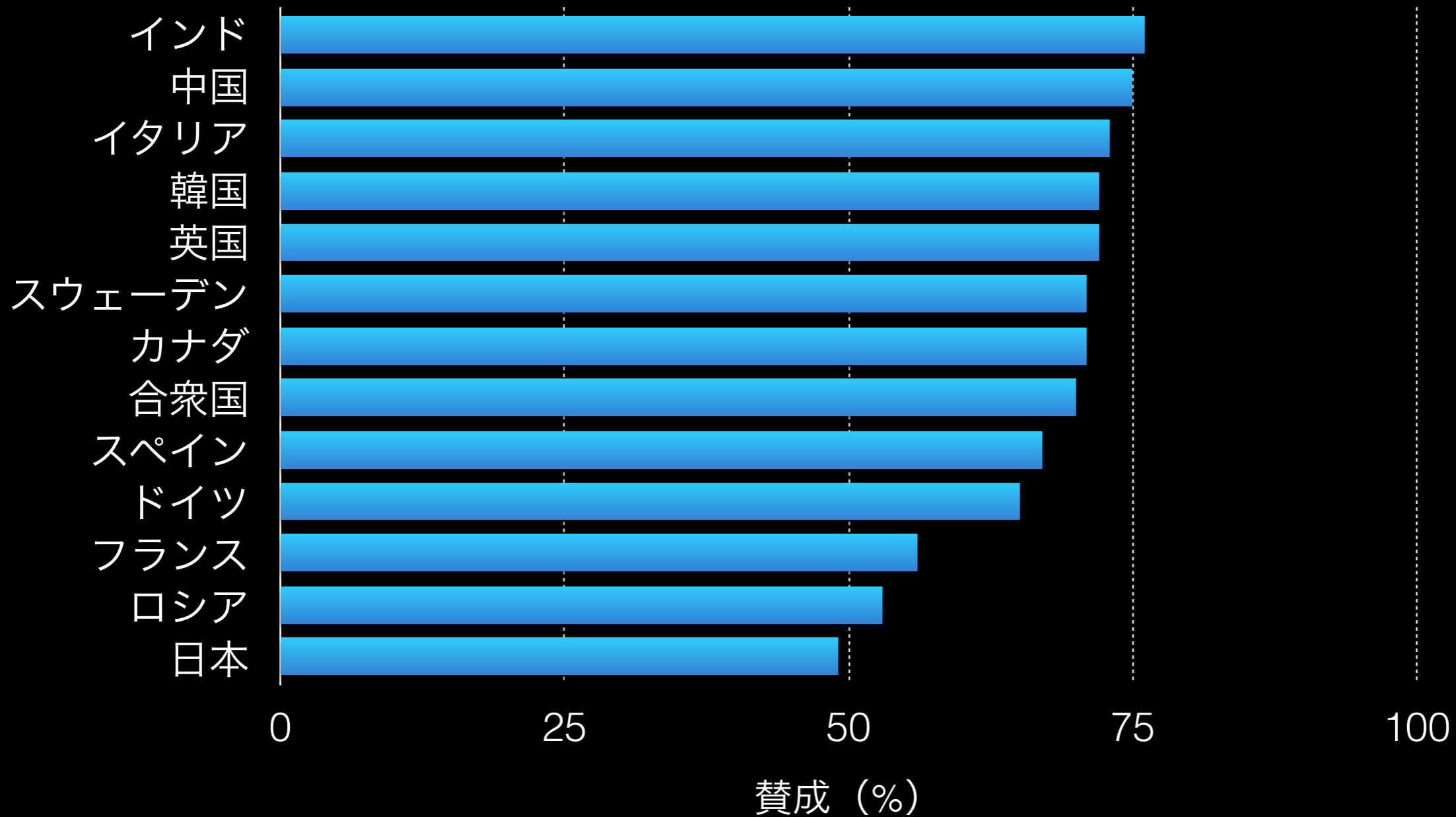
経済人にとっての公平性

- 機会の平等
 - ▶ 競争の機会が公平
 - ▶ 競争の条件、ルールが公平
 - ▶ (競争力の公平性?)

実際は？

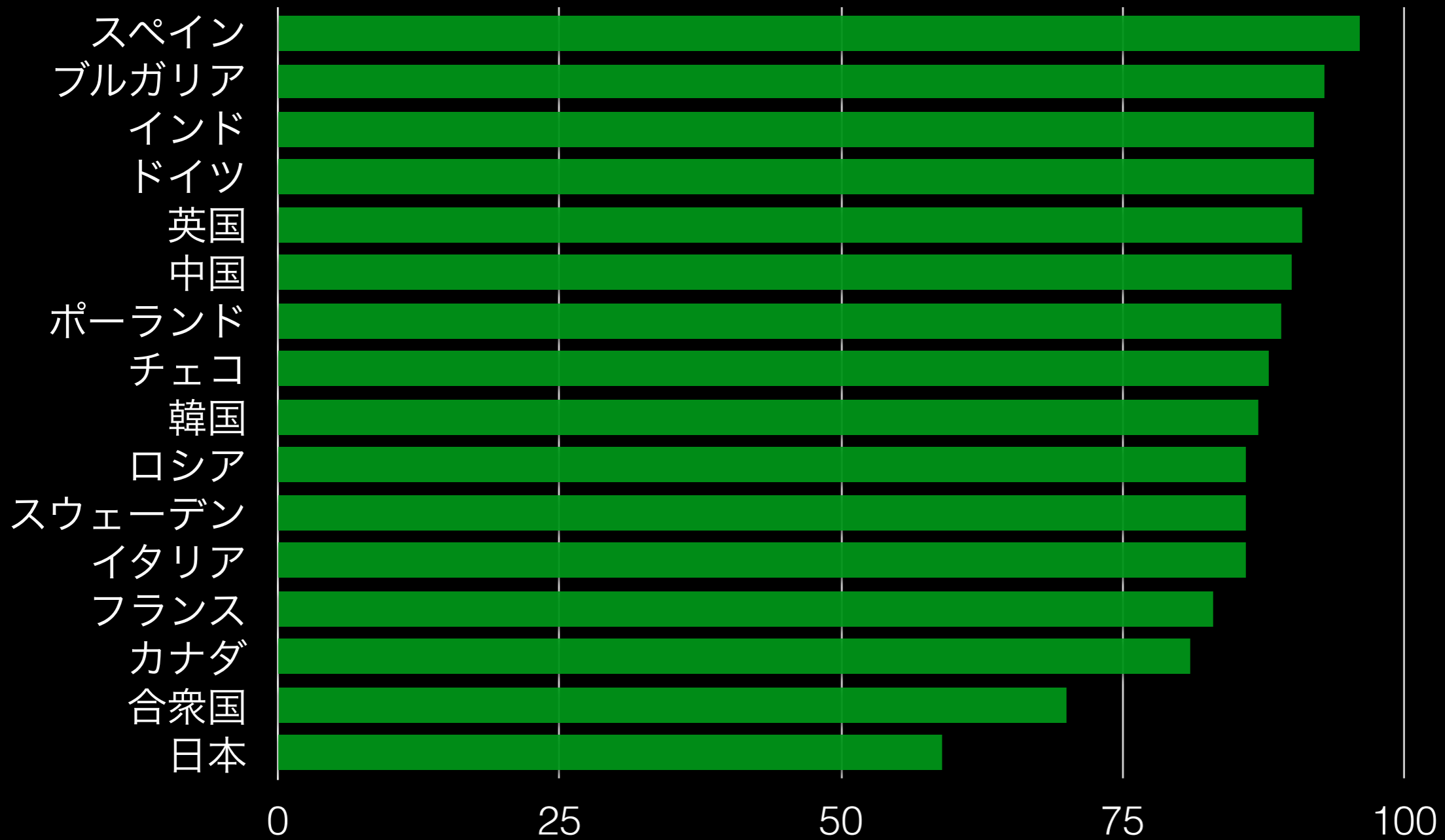
- 現実社会の人間は、どう考えている？
 - ▶ 市場（格差が生じる舞台、格差の原因）について
 - ▶ 競争に敗れた人への対応

貧富の差が生まれたとしても 多くの人々は自由な市場でより良くなる



データ：Pew Research Center
大竹 (2010: p.7)

自立できない非常に貧しい人たちの面倒をみるのは 国の責任である



データ：Pew Research Center

大竹 (2010: p.8)

国家間の差と規範

- 国ごとに異なる回答は、国ごとに異なる「公平性規範」の現れか？

公平性を明らかにする

- 実験によって人間の公平性をあきらかにする
- 経済学（と心理学）
- ゲームをプレイさせる
- 理論的予測（ゲームの均衡）と実際の行動を比較
- 様々な国で同様の実験を行い、比較する

最後通牒ゲーム

- 2人のプレイヤー：プレイヤー1と2
 - 1.プレイヤー1が、1万円のうち x 円をプレイヤー2に提供する（残りを自分で取る）ことを提案する
 - 2.プレイヤー2は、プレイヤー1の提案を受け入れるかどうか決める
 - ▶ プレイヤー2が提案を受け入れれば、プレイヤー2は x 円、プレイヤー1は $(10000-x)$ 円を手に入れる
 - ▶ プレイヤー2が拒否すれば、2人とも何ももらえない

「経済人」がとるはずの行動

- プレイヤー1：1円を提案する
- プレイヤー2：提案を受け入れる

★なぜ？

★現実社会では、予測通りの行動が観察される？

実験の結果

- 典型的な先進国の大学生：44%程度（最頻値は50%）をプレイヤー2に提供し、プレイヤー2は提案を受け入れる (Roth, Prasnikar, Okuno-Fujiwara, and Zamir 1991)
- 発展途上国の小規模社会：26～58%の提案（最頻値は15～50%）、低額の提案でもほぼすべて受け入れる社会もあれば、高額（50%以上）の提案でも拒否する社会も (Henrich et al. 2001)

独裁者ゲーム

- 2人のプレイヤー：プレイヤー1 と2
 - 1.プレイヤー1（独裁者）が、1万円のうち x 円をプレイヤー2に提供する（残りを自分で取る）ことを宣言する
 - 2.プレイヤー2には選択の余地がない
 3. プレイヤー1が決めたとおり、 x 円がプレイヤー2に提供され、残りはプレイヤー1の元に残る

「経済人」がとるはずの行動

- プレイヤー1：0円を提案する
- プレイヤー2：（何もできない）

★なぜ？

★現実社会では、予測通りの行動が観察される？

実験の結果

- 先進国の大学生：最も多い提案は0円、次に多いのは半額！
- 発展途上国の小規模社会：最頻値が50%社会もあれば、それが10%の社会も

公共財ゲーム

- N人の集団の各人に1000円ずつ渡す。
- 各人が、他人の行動を知ることなく、1000円のうちx円を「公共のために」提供する。
- ゲームの運営者は、各人が提供した額の合計を2倍した額を、N人の平等に分配する。
- 各人は、1000円のうち公共財に提供しなかった額と、最後に分配される額の合計を手に入れる。

「経済人」がとるはずの行動

- 全員が全額提供するのが集団全体にとって最も得
- 各プレイヤー：タダ乗りする誘因
- 全員タダ乗りする（公共財は提供されない）！

★なぜ？

★現実社会では？

実験の結果

- 先進国の大学生：最も多いのは0円の提供、2番目に人気があるのは100%の提供、平均は40～60%
- 発展途上国の小規模社会：0%が最頻値で100%提供者がいない社会や、0も100もない社会など

理論的予測と実験の乖離

- 「経済人」モデルの失敗
- 実験の結果は何を意味しているのか？

実験からわかること

- 「経済人」モデルの予測どおりには行動しない
 - ▶ どの社会でも、公平志向（平等志向、格差回避志向）が見られる
 - ▶ どの程度の差を公平と考えるか：社会によって異なる

公平性規範と競争に対する見方

- 社会によって公平性が異なり得る
- 先進国では差が見られない：競争と弱者の保護に対する態度、意見にばらつきがあるのはなぜ
- 公平性規範だけでは説明できない

格差の是非

- 少しの差も受け入れない社会
 - ▶ 格差は、社会的「悪」とみなされる可能性
 - ▶ 競争へのインセンティブにならない：市場経済への信頼が揺らぐ（?）
- 大きな差でも受け入れる社会
 - ▶ 競争へのインセンティブ：公平な（競争の結果としての）格差
 - ▶ 格差は問題にならない（?）

所得格差に関する意識

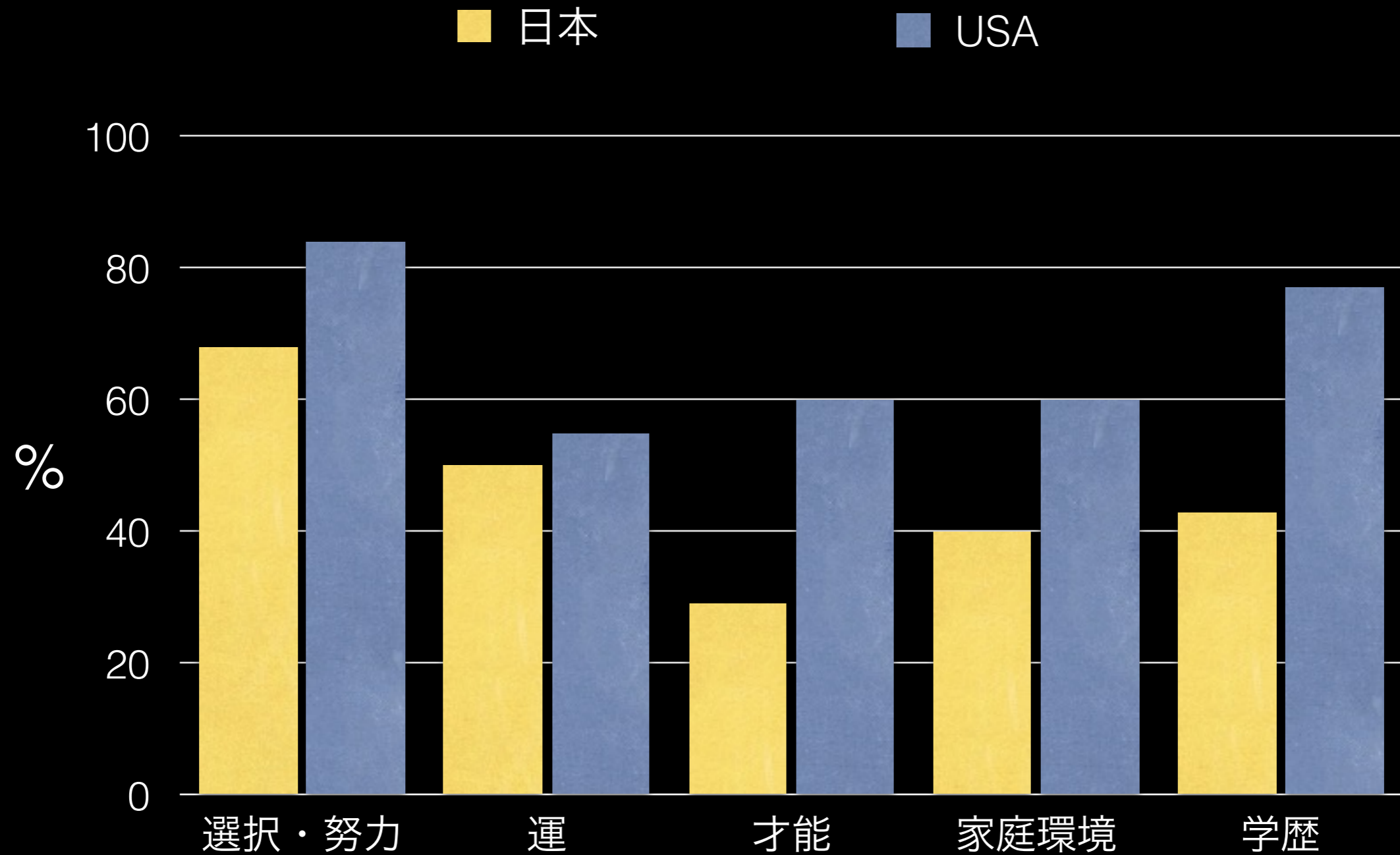
- 格差の現状
 - ▶ 合衆国：大きな格差、格差の拡大
 - ▶ 日本：高齢化による格差、格差の安定 (?)
- 格差の認識
 - ▶ 日米に差 (?)

所得に対する認識、態度

- 「所得は何で決まる」と考えているか
 - ▶ 合衆国：選択・努力 > 学歴 > 才能 > 家庭環境 > 運
 - ▶ 日本：選択・努力 > 運 > 学歴 > 家庭環境 > 才能
- 「所得は何で決まるべき」と考えているか
 - ▶ 合衆国：選択・努力 > 学歴 > 才能 > 家庭環境 > 運
 - ▶ 日本：選択・努力 > 才能 > 学歴 > 運 > 家庭環境

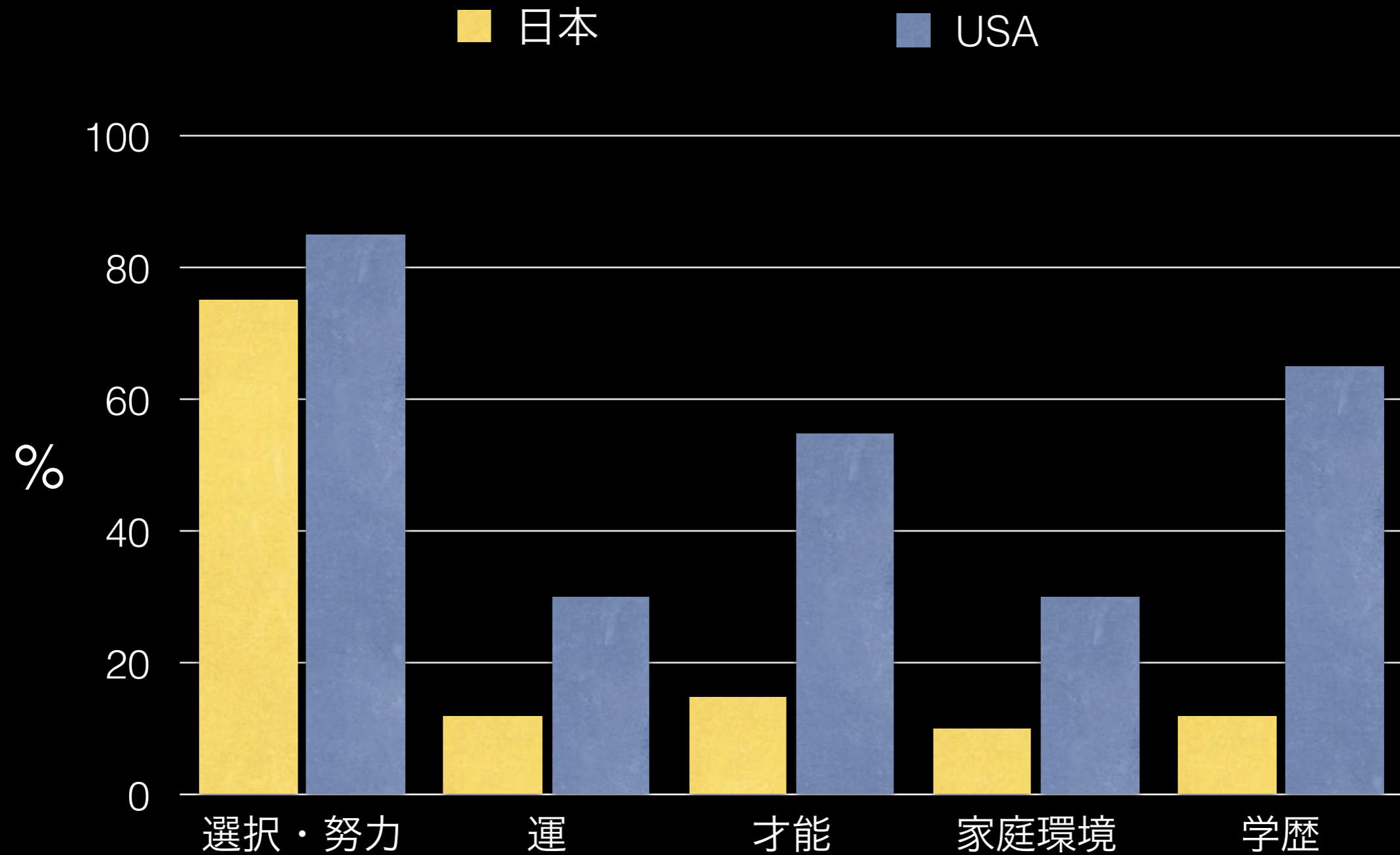
(大竹 2010: 133)

所得は何で決まるか



出典：大竹 (2010: 133)

所得は何で決まるべきか



出典：大竹 (2010: 134)

日米の差

- 日本人がアメリカ人より大きな格差を感じているとすると、それはなぜか？
 - ▶ 日本人：努力や選択以外で所得が決まるのを嫌がる
 - ▶ アメリカ人：様々な要因によって所得が決まることを受け入れる

公平性と格差

- 公平性の捉え方によって格差の評価が異なり得る
- 公平性、格差の参照点は？
 - ▶ 社会規範
 - ▶ 文化？
 - ▶ 歴史？
 - ▶ 政治経済制度？

まとめ

- 人間には公平性への志向がある
- 公平性志向の強さは社会によって異なる
- 客観的に同程度の格差でも、問題になる場合とまらない場合がある
 - ▶ 格差がどう作られたか
 - ▶ どの社会における格差か
 - ▶ 誰が格差を観察するか

来週の内容

- 格差の測定
 - ▶ 格差をどのように測るか？
 - ▶ 格差の測り方は格差の見え方にどう影響するのか